

第三十 自・轉 車 (マーチ).....高等女學校八名

第卅一 ばすけつと、ぼーる.....大學部五十名

第卅二 圓 舞.....大學部各學年
高等女學校第四、五年

君 が 代.....一 同 合 唱

番 外 ろーん、てにす.....大學部七名及び
正午八時より全九時まで
正午より午後一時まで.....高等女學校五名

●竹柏會、佐々木信綱氏送別會 先月四日、小石川

酒井家邸内に於て、佐々木氏が今回南清漫遊の途

に上らるゝに付きて送別會を開きぬ。席上島田三

郎、巖谷小波氏の演説あり、終りて園遊會の催しあ

り、一同撮影の後五時散會したり、因に全君は先月

卅日新橋發旅行の途に上れりといふ南清偉大の風

光、幾多の詩料を供せんとして君を待てるなるべし。

●東洋女學校創立 文學博士村上專精、文學士

和田鼎、同村上龍英氏等發起人となり大隈伯、渡

邊子、井上兩文學博士等朝野の學者紳士の賛成を

得て一大女學校を創立する由資金は凡そ十五萬圓
の豫算にて募集すべしと其趣意書に曰く

夫れ我國古來の徳教たる近世二百年間士人以上に在ては頗る儒
教に據る者ありと雖も溯りて千數百年間貴賤上下に通じて費ね
く感化を及ぼせる者を求むれば其れ唯佛教の一途あるのみ而し
て其の化の及ぶ所遺傳の久き浸染の深き其の勢力年平抜く可か
らざる者あり是を以て苟くも之に據て之を導くとときは俗を見へ
風を移すも亦甚だ難しと爲さず是れ固より男女を論せずと雖も
女子に於て尤も更に其の然るを見る然れども現今佛教各派の情
態たる久しく眞諦に偏倚して俗諦に疎濶なりしを以て未だ遠か
に其要求に應ずること能はざる者に似たり是に於て世或は儒教
を主とし或は基督教に資て以て之が教養を爲す者ありと雖も概ね
奮陋に泥まざれば新奇を衒ひ遂に國情民俗に契當すること能は
ず其の甚しきは知識愈々進みて言行愈々社會に逕庭し感化益々
深くして動靜愈々家庭に軒輊するが如き者あるに至る人生の一
大恨事豈復た之に過ぐる者あらんや

我等自ら揣らず此の闕典を補充せんが爲めに茲に東洋女學校を
創立し其の智能は尤も社會に切實なる常識の發達を主とし其の
徳器は尤も家庭に順應せる精神の化育を要し新奇を衒はず奮陋
に泥まらず智徳相資けて以て健全なる淑女を陶冶する一大鑛鑄と
爲さんと欲す云々

●千葉縣女子師範學校設立認可 豫て設置出願

中なりし千葉縣女子師範學校は愈々千葉縣千葉郡千葉町大字千葉同寒川に設置し、明治三十七年四月一日より開校の旨去月八日許可せられたり。

●文部省教員檢定本試験　は愈本月五日より引き続き廿五日に結了する由なり。

新刊の讀物

◎運命開拓策

世は擧つて自利にのみ汲々たる時、『要するは實に自ら教育し、訓練し、誠飾して、品性と人格とを崇うせんとする丈夫』である。本書は實に、自ら此の如き丈夫たらしめんとて、譯述せられたるものにて古來幾多の偉丈夫が、確固不拔の理想を抱いてよく逆境に處し、障害と戦ひ、遂に自ら運命を開拓する實例は、讀むに従つて、紙上に躍出す。炎

焦既に去つて、燈火漸く親しむべきの時、一讀案を打つて快哉を叫ばしめ再讀遂に嚮天をして起たしむる概ありといふべき書物である。(三十錢　本郷弓町一ノ八　成功雜誌社發行)

◎天真爛漫

婦女叢書の第一篇たる本書は、前々から婦女新聞に方々から集つて來た子どももの言行を一冊の可愛い本に綴つたのである、子どももの書いた、不思議な繪なども入つて居る。讀んで罪のないこと、此本の如きは少いでせう。(一冊十三錢　半込區東五軒町四一　婦女新聞社發行)

◎驪語　全一冊　本多増次郎譯

最初親切な善き主人の家に養はれて周到な注意と温情を以てよく育てられ、馬として極めて良く育